

## 「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」最終評価結果表

研究領域等	グローバル・イシューに対応した新たな地域研究の可能性の探索 －開発等に伴う環境問題
研究課題名	南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究
責任機関	京都大学
研究代表者	安藤 和雄（東南アジア研究所・准教授）
研究期間	平成19年度 ～ 平成21年度
主に研究対象とする国名	( バングラデシュ ) ( ネパール ) ( )

## 総合評価

- ( ) S. 所期の研究計画以上の取組が行われた。  
 ( ) A. 所期の研究計画と同等の取組が行われた。  
 (○) B. 概ね所期の研究計画と同等の取組が行われたが、一部で当初計画以下の取組もみられた。  
 ( ) C. ある程度所期の研究計画と同等の取組が行われたが、当初計画以下の取組もみられた。  
 ( ) D. 所期の研究計画以下の取組であったが、一部で当初計画と同等又はそれ以上の取組もみられた。  
 ( ) E. 総じて所期の研究計画以下の取組であった。

## [コメント]

「開発と環境」の問題に対し、現地で活動するNGOに焦点をあて、当事者の現場のニーズに応える「社会的ソフトウェア」の構築に取組み、インベントリー調査をもとにNGOとともに社会的ソフトウェア構築委員会を組織し、現場の直感や意識を掘り起こして分析し、アクション・プランを提示するなど現地で活発な活動を行い、地域研究の今後の方向性に関する問題提起を行った点は高く評価できる。しかしながら、所期の研究計画からみると、ネパールにおける調査が不足したため南アジアの周縁といった対象地域の特性が十分生かされておらず、また、日本人のNGO・NPO実践活動経験者を対象とした調査が実施されておらず、一部で当初計画以下の取り組みがあった。

## 項目ごとの評価

1. 本事業の目的及び研究領域等の趣旨に合致した研究が実施されたか。

- A. 十分実施された                       B. 概ね実施された  
 C. ある程度実施された                 D. あまり実施されなかった  
 E. 実施されなかった

### [コメント]

バングラデシュにおけるNGOの開発と環境保全への対応策に関する調査研究の実施は、本研究課題の研究コンセプトであるグローバル・イシュー「開発等に伴う環境問題」に合致していると評価できる。

しかしながら、NGO活動の調査とネットワーク作りを大きく超えたものには至らなかったようにみられる。また、「開発等に伴う環境問題」というグローバル・イシューに関して、調査対象の問題の多くが「開発」との関係性が十分ではなく、調査対象NGOにおける開発と環境の関わりに濃淡があるように見受けられる。

2. 設定されている社会的・政策的ニーズに応える形で研究が実施されたか(研究の過程)。

- A. 十分実施された                       B. 概ね実施された  
 C. ある程度実施された                 D. あまり実施されなかった  
 E. 実施されなかった

### [コメント]

本研究課題の主眼目である、当事者性をもった「社会的ソフトウェア構築委員会」のNGOの参加を得ての組織化、NGOの活動インベンドリー調査、アクション・プランの提示を含めたワークショップの実施、NGO間の意思疎通問題の解消への貢献などを精力的に進めたことは高く評価できる。

しかしながら、ネパールにおける調査が十分であるとは言い難く、当初計画していた日本人のNGO・NPO実践活動経験者を対象とした聞き取り調査が実施できておらず、当初より情報収集をもう少し丹念に行うことで、改善が期待できたと思われる。

3. 社会的・政策的にニーズに応える研究成果が創出されたか。

- A. 十分創出された                       B. 概ね創出された  
 C. ある程度創出された                 D. あまり創出されなかった  
 E. 創出されなかった

[コメント]

「社会的ソフトウェア」の実践的な構築、具体的には、適切な手法を用いてNGO当事者が自覚していない部分を認識に導き、プランニングにつなげる仕組みを発掘したことは高く評価できる。

しかしながら、開発援助の企画・実施を担当する日本の外務省やJICAなどの政府関係者に対する政策提言や、援助関係者に対する具体性のある提言にまでは至っていない。

また、NGO間のサステイナブルな協働関係維持にも課題が残っているように見受けられる。

4. 学術的に高い水準が確保されているか。

- A. 十分確保されている                 B. 概ね確保されている  
 C. ある程度確保されている         D. あまり確保されていない  
 E. 確保されていない

[コメント]

時間的制約の中でもっぱら現地・現場での調査活動に精力を注ぎ、参加型の手法を用いて「当事者性に依拠した直感の客観化と分析」という新しい地域研究の手法に挑み、アクション・プランを作成したことは評価できる。

しかしながら、本研究課題に関わった研究者達の地域研究者としての豊富な経験蓄積及び高い到達点と、本研究の実践的成果とを接続し、また、NGO論あるいは援助論の到達点とつなげることで、より高い水準を目指すことが可能であったのではないかとと思われる。

今後、本研究課題の研究成果の汎用性、つまり、他地域や他のNGOで活用していくことの検証が課題として残っている。